北の鉄道風景

Train number; 9042D
2022.10.15 12:56
1/320, f/5.6, ISO 200, f=82mm, Daylight/Sunny
5504×8356 Raw

第127回

絵画教室

それは話が違う、と私は思った。その途端、周囲の色彩はすべて灰色になり、眼の前の花瓶の花もしおれたように見えた。

絵が好きだった。いつも絵を描いていた。周囲のおとなたちが、「絵が好きなのねえ」「上手ねえ」と褒めそやすなかで、絵画教室に行ったら？という話が出てきた。私は、それは何だと尋ねた。絵の先生について絵を習うから絵がうまくなる所だという。私の仲いい友達も通っているらしい。皆で一緒に習うなら楽しそうだと行くことにした。

初めての教室で、好きな絵を描いてみなさいと言われた。私はためらうことなく、大好きな汽車の絵を描いた。先生は汽車ねえ、と手にとって何か言ったようだったが、上手いとも下手だとも言わなかった。ましてここをこうするともっと汽車らしくなるといったことも言わなかった。がっかりした。

翌週、教室の真ん中に花瓶があって、

ついぞ見ることが叶わなかったC54形蒸気機関車は、絵の中でしか走ってくれなかった。
だが彼は絵を描けることの価値を十分に伝えてくれた。

写真と文＝眞船直樹

それを描けという。面白くない。その翌週、今度はそこに花が挿してあって、それを描けという。ますます面白くない。私のスケッチは回を重ねるごとに、ひどい物になっていくのが自分でもよくわかった。そして、とうとう、やめる、と親に言った。親は残念がったが、私ははっきり、面白くない、と言った。

絵画教室の時間が自由時間になった。ほとんど未使用のまま手元に残ったスケッチブックに大好きな汽車が蘇った。本物の汽車も、田んぼの向こうを元気に走っていたから、好きなだけ会いに行けた。こっちの方がずっと楽しい。心底そう思った。

今、毎年、新しい学生たちとの出会いがある。私は、面白くない顔をしている学生を探す。あいつだ！あいつは、スケッチブックに何を描きたいのか。そもそも俺の前で描いてくれるのか。私はそれに対して、こうすればいいとアドバイスできるのか。それをあいつは真正面から受け取ってくれるのか。さあ、勝負するぞと覚悟する。あいつを笑顔にできたら、俺はまだまだ世の中の役に立っているという証明になる。Ⓙ